様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６２４４０３７

研究課題名（和文）「日韓相互認識」研究の深化・発展のために―東アジア情勢のなかで―

研究課題名（英文）For Growing and Developing the Study of Japan-Korea Mutual Recognition: In the International Situation in East Asia

研究代表者
吉田　裕（Yoshida, Yutaka）

一橋大学・大学院社会学研究科・特任教授

研究者番号：２０１６６９７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　24,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東アジア世界の中の日本・朝鮮の関係に焦点をあわせながら、日本の側の対朝鮮認識がどのようにして歴史的に形成されたのかという問題を、朝鮮の側の対日本認識の形成と関連させながら、歴史具体的に明らかにしようとするものである。こういった相互の対外認識の歴史的形成を解明しようとする研究を「日韓相互認識」研究と呼び、これを、日本の研究機関に属する研究者だけではなく、ソウル大学校を中心とする韓国の歴史研究者との研究交流（共同研究や共同史跡踏査、シンポジウム、等）を通じて行うことができた。２０年間にわたって積み重ねてきた研究交流を踏まえ、それを発展させて、真の「日韓相互認識」に繋げていきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日韓両国関係が「歴史認識」問題をめぐって対立し不安定化する状況のなかで、本研究が、両国の研究者間の相互交流のネットワークの形成におおいに寄与してきたことを、本研究の最大の成果として意義づけておきたい。本研究の研究期間に４回（第１７～２０回）のシンポジウムと共同史跡踏査を行ってきているが、そうした活動を通して、なによりも、お互いへの信頼感を醸成するとともに、「日韓（韓日）相互認識」研究をいかに深化させるかという問題意識を共有することができた。２０年にもわたる長期間の研究交流の実績は、今後の日韓関係において、重要な礎になるであろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is intended to make clear concretely the problem that how the recognition toward Korea in the Japanese side is formed historically while connecting to the formation of the recognition toward Japan in the Korean side with focusing on the relations between Japan and Korea in the East Asian world. We call this kind of study which attempt to elucidate the historical formation of mutual foreign recognition the study of “Japan-Korea mutual recognition,” and it could be done through the study exchange (joint research, joint exploration on the historic sites and symposium and others) with historical scholars in Korea, mainly in Seoul National University. Taking account of the study exchange for 20 years, we would like to develop it and realize the true “Japan-Korea mutual recognition”.

研究分野：日本近現代史

キーワード：日本史　東洋史　朝鮮史　交流史　学術交流　相互認識

１．研究開始当初の背景

近年、「歴史認識」の問題が、東アジアにおける国際関係を不安定化させる重要な要因として、大きな注目を集めるようになっている。この問題は、各々の国民国家が国民的統合の基盤としている「記憶の共同体」相互の相克や摩擦という側面を有しているだけに、問題の処理を誤るならば、深刻な政治問題に発展する可能性を常にはらんでいる。とりわけ、ここ１，２年は「歴史認識」問題が、領土問題と結びつきはじめているだけに、問題はいっそう深刻である。こうした状況の中にあって、今、歴史学に求められているのは、この「記憶の共同体」をいかに歴史的に相対化するかという学問的試みである。すなわち、様々な記憶相互間のせめぎあいと国家や社会諸集団による関与の過程を経て、「記憶の共同体」がいかに形成されるのか、また、そこにどのような亀裂や矛盾がはらまれているのかを具体的に明らかにすることである。その際、重視する必要があるのは、他者認識の問題である。「記憶の共同体」の核をなすのは、歴史・文化・伝統を共有するとされる「日本人」としての同胞意識だが、この日本人としての同胞意識は、他者認識と密接不可分の関係にあり、他者との様々なレベルでの交流を通じて形成される側面を有している。本研究は、「記憶の共同体」の形成過程において、この他者認識がいかにして形成されたのかという問題を明らかにしようとするものである。具体的には、日本人の対朝鮮認識の形成過程を、朝鮮側の対日本認識の形成過程とも関連させながら、歴史的に解明していきたい。以上の研究目的を達成するため、16 年にわたる共同研究を積み重ねてきたが、その過程で、韓国側のメンバーも含めて、次のような認識を我々は共有するに至った。

第一は、「植民地的近代」という分析枠組の重要性である。宮嶋博史他編『植民地近代の視座　朝鮮と日本』（岩波書店、2004 年）が指摘しているように、それは双方の側の民族主義を相対化しつつ、植民地期と解放後を「近代」という視点から連続したものとしてとらえる分析枠組であり、同時に植民地期における権力作用が解放後の韓国の人々の意識や日常生活をいかに規定しているのかを問うものでもある。「植民地的近代」という枠組は、「記憶の共同体」を分析する際にも重要な意味を持つ。日本と韓国の歴史教科書を例にとるならば、歴史認識の問題では大きく対立する面があるとはいえ、自国史と世界史の二本立てで歴史教育を行うという点では、両者の間には強い類似性が認められるからである（中村哲編『東アジアの歴史教科書はどう書かれているか』日本評論社、2004 年）。このことは、植民地時代の歴史教育の枠組が、解放後の韓国の歴史教育を大きく規定していることを意味している。

第二には、「近代化と衛生」という研究視角の導入である。朝鮮における医療・衛生環境を、伝染病の流行とそれへの対処のあり方を中心に検討すると共に、植民地化以前の朝鮮、植民地期に日本主導で進められた医療・衛生行政、そして戦後の韓国までを展望して考察していきたい。

第三には、史跡やそれらを中心にして行われる各種のセレモニーが、歴史的な記憶の形成に及ぼす影響力の大きさである。すでに、歴史認識と史跡の関係については、羽賀祥二『史跡論』（名古屋大学出版会、1998 年）などの優れた先行研究があり、これらにより本共同研究の重要性を再認識させられた。また、共同調査の結果、遺跡の保存は観光資源化の動きとも関連している場合が多く、そのことが記憶の形成に微妙な影響を及ぼしていることも確認できた。今後は、植民地期に朝鮮総督府によって実施された史跡指定事業にまで視野をひろげて研究を行いたい。なお、韓国との共同調査の成果の一端は、都珍淳「世紀の忘却を超えて－日露戦争 100 周年記念行事と記念物を中心に－」（『年報日本現代史 13』現代史料出版、2008 年）に示されている。

第四は、書物を史料として活用することである。従来の日本史研究では、手書きの文書史料は重視されてきたが、書物は複製物であるとしてその史料的価値を認めてこなかった。しかし、1990 年代以降認識が大きくかわり、書物を史料として歴史を叙述する新しい研究動向が出てきている。これをうけて、近世の日朝関係にきわめて重要な役割を果たした対馬藩の蔵書や植民地期につくられた京城帝国大学の蔵書（ソウル大学図書館蔵）等、日朝関係と関わって蓄積された書物に光を当て、日韓両国の相互認識の問題をさらに掘り下げて解明していきたい。

２．研究の目的

本研究は、東アジア世界の中の日本・朝鮮の関係に焦点をあわせながら、日本の側の対朝鮮認識がどのようにして歴史的に形成されたのかという問題を、朝鮮の側の対日本認識の形成と関連させながら、歴史具体的に明らかにしようとするものである。こういった相互の対外認識の歴史的形成を解明しようとする研究を「日韓相互認識」研究と呼び、これを、日本の研究機関に属する研究者によって究明し議論するだけではなく、ソウル大学校を中心とする韓国の歴史研究者との研究交流（共同研究や共同史跡踏査、シンポジウム、等）を通じて行っていきたい。これまで 16 年間にわたって積み重ねてきた研究交流を踏まえ、それを発展させて、真の意味での、未来にむけての「日韓相互認識」につなげていかねばならない。本研究の課題である。

３．研究の方法

（１）研究目的を達成するために、7 つの研究の柱を設定し、集中的に研究を行う。
①植民地における近代学校教育の実態とその歴史的意義を踏まえながら、戦前から戦後への連続／非連続を見据えた諸学校の展開を、両国間の社会過程と関係性に注目し、比較的な視点に留意して検討する。その際に、近代的学校教育の領域に関わらなかった人たちにも注目する。
②19 世紀後半から進んだ西洋由来の医学知や医療技術の流入と、それにともなう衛生観の形成に焦点を当てる。具体的には、朝鮮社会における医療・衛生環境が、植民地期を経てどのように変容してゆくのかを、同時代の日本社会との比較も交えつつ検討していきたい。
③前近代の政治・社会や文化についての日朝比較を行う。また豊臣秀吉の朝鮮侵略（壬辰・丁酉の倭乱)をめぐる歴史的記憶の問題を研究する。
④宗家を通じてみた前近代日朝関係の歴史的変遷に関する研究を発展させる。一つには、宗家の蔵書目録や蔵書を史料として、対馬藩にどのような蔵書が蓄積されたかを解明し、日本側の対朝鮮認識の特質を明らかにする。二つには、朝鮮王朝後期における日朝外交・日朝貿易の朝鮮側の窓口であった東萊府に関する研究に本格的に取り組む。
⑤日本との結びつきが強かった対馬及び朝鮮半島南岸の日朝関係に関連する史跡の共同調査を行う。特に植民地期において史跡として認定された遺跡を日韓合同で調査を行う。その際、解放後に、これらの史跡がどのように扱われたのかという問題にも注目する。
⑥朝鮮人社会と日本人社会をつなぐ媒介者の役割に注目したい。具体的には、近代日本の動向に対して賛否あざなえる対応を示した朝鮮の言論人、渡日朝鮮人留学生、在日朝鮮人と、「韓国併合」に伴い新たに創設された朝鮮王公族・朝鮮貴族がそれである。
⑦日本は朝鮮を植民地として支配するのに当たって、朝鮮を「文明化」し、「開発」する使命があるとして、正当化を図った。そのような「文明化」のイデオロギーの具体的な諸相を明らかにするとともに、そのような支配正当化論が第二次世界大戦後の日本における対朝鮮認識に大きな影響を及ぼしたことについても対韓外交、日韓会談などに焦点をあわせながら、分析を行う。
（２）研究計画の概要は次の通りである。
①「日韓相互認識」研究を深化させるために、６つの研究項目班を設定して、班ごとで個別事例研究を深める。
②国内の研究者を組織して「日韓相互認識」研究会を開催する。個別の研究報告・討論に加え、研究項目班の成果報告も行う。
③ソウル大学校を中心とする韓国側の歴史研究者と日韓歴史共同研究シンポジウムを年１回開催する。あわせて日朝関係に関わる史跡の共同調査も行う。
④シンポジウム及び共同調査の成果集を印刷する。また研究会誌『日韓相互認識』を年２巻印刷する。ともに、一橋大学機関リポジトリを通してインターネットで発信する。

４．研究成果

（１）日韓両国関係が「歴史認識」問題をめぐって対立し不安定化する状況のなかで、本研究が、両国の研究者間の相互交流のネットワークの形成におおいに寄与してきたことを、本研究の最大の成果として意義づけておきたい。本研究の研究期間に４回（第１７～２０回）のシンポジウムと共同史跡踏査を行ってきているが、そうした活動を通して、なによりも、お互いへの信頼感を醸成するとともに、「日韓（韓日）相互認識」研究をいかに深化させるかという問題意識を共有することができた。この点を第一の成果として指摘しておきたい。
（２）Ａ～Ｆの６つの研究項目班がそれぞれの計画に応じて資料収集と調査を行い、研究成果を挙げることができた。例を挙げれば、Ａ班の木村元が、韓国側の研究者である朴桓甫との共同研究の成果を、第１８回日韓歴史共同研究シンポジウム（於光州科学技術院）で「学校の戦後７０年―日韓（韓日）の比較史研究―」と題する研究報告を行った。
（３）６つの研究項目班の研究成果を持ち寄って、研究分担者と研究協力者が集う「日韓相互認識」研究会・会議を７回開催した。開催日及び報告者は次の通りである（敬称略）（会場はいずれも一橋大学マーキュリータワー３６０１室）。 第２３回（２０１４年7月２８日）：加藤圭木「朝鮮東北部の社会変容と植民地支配―清津港の建設をめぐって―」、高柳友彦「温泉資源の利用と開発―高度成長期の熱海温泉を事例に―」。第２４回（２０１５年7月２６日）：李成市「日本近代史学における韓国古代史認識」、吉田裕「日本の戦争観と戦争責任論」、木村元「戦後の学校化社会の成立と展開―日韓（韓日）の比較史研究の視点から―」。第２５回（２０１６年1月１０日）：蔣允杰「植民地初期朝鮮における軍需皮革工業の成立」、洪昌極「植民地期朝鮮における東洋拓殖株式会社の江西干拓事業」。第２６回（２０１６年7月２４日）：崔誠姫「第二次朝鮮教育令施行期における中等女子修身教育」、石居人也「「足尾銅山をめぐるふたつの運動―田中正造というメディア―」、権容奭「大衆文化の交流と日韓相互認識」。第２７回（２０１７年3月２日）：李玲実「解放直後の在日朝鮮人女性運動―女性活動家の分析―」・第２８回 （２０１７年7月２３日）：小関悠一郎「近世日本における「富国強兵」論をめぐる議論―１９世紀初頭の幕藩政治史・儒学受容との関連―」、小川和也「日本に

おける牧民書の受容と展開―『牧民忠告』『牧民心鑑』を中心に―」、若尾政希「『東照宮御遺訓』と日本近世」。第２９回研究会（２０１８年3月１３日）：崔仁鐵「解放後韓国における転向団体・国民保導連盟の転向政策と宣伝活動」。
（４）本研究の総括と、韓国の日本史・朝鮮史研究者（ソウル大学校を中心とする研究者）との研究交流のために、年に１回、日韓歴史共同研究シンポジウム及び日韓関連史跡の共同踏査を行った。概略は次の通りである（敬称略）。

<２０１４年度>第１７回日韓歴史共同研究シンポジウム・共同学術踏査（日本・東京、長野県、日程２０１４年8月１８日～２２日）、8月１8日：レセプション、8月１9日：国際シンポジウム（一橋大学佐野書院）、報告：南基鶴「『吾妻鏡』にみえる「武威」の諸相」、加藤圭木「朝鮮東北部の社会変容と植民地支配―清津港の建設をめぐって―」、都珍淳「王仁顕彰の両面：民族主義と植民主義、その連繋と変奏」、高柳友彦「温泉資源の利用と開発―高度成長期の熱海温泉を事例に―」、李泰鎮「「李王職」所蔵の『永楽大典』1冊買入経緯追跡―朝鮮総督府の中国古文献大量買入と「東洋史」研究基盤構築―」、8月２０日～２１日：共同学術踏査　長野県　松代大本営・無言館・飯田歴史研究所他。

<２０１５年度>第１８回日韓歴史共同研究シンポジウム・共同学術踏査（韓国・光州、翰林大学校日本学研究所・韓日歴史共同研究会後援・東北亜歴史財団との共催、日程２０１５年8月１８日～２２日）、8月１8日：ソウル市内踏査、安重根記念館・漢陽城郭・朝鮮神宮、8月１9日：潭陽郡昌平面にてレセプション（故中村政則先生追悼会）、8月２０日：国際シンポジウム（光州科学技術院教授会議室）、主題「ふりかえってみる韓日両国の相互認識」、報告：吉田裕「「戦後七〇年」と日本人の歴史認識」、木村元・朴桓甫「学校の戦後７０年―日韓（韓日）の比較史研究―」、李成市「日本近代史学における韓国古代認識―植民地主義の克服のために―」、盧泰敦「８世紀中葉新羅・日本関係の展開」、趙廷祐「朝鮮総督府満洲移民政策の裏面―鮮満拓殖会社設立の経緯を中心に―」、8月２１日：日韓合同踏査、光州踏査（五・一八墓地、五・一八資料館、光州学生独立運動記念館）、羅州踏査(正綏樓錦城館・牧使內衙・榮山浦・近代街道・羅州国立博物館)、8月２２日：井邑 東学農民運動関連遺跡を踏査。

<２０１６年度>第１９回日韓歴史共同研究シンポジウム・共同学術踏査（日本・東京、北関東、日程２０１６年8月１９日～２２日）、8月１9日：レセプション、8月２０日：国際シンポジウム（一橋大学佐野書院）、報告： 金興秀「金玉均と『甲申日録』」、石居人也「足尾銅山をめぐるふたつの運動―田中正造というメディア―」、李泰鎮「安重根と梁啓超―近代東アジアの二つの灯火―」、權泰檍「１９１０年代の日帝植民地主義の特徴と挙族的３・１運動」、崔誠姫「第二次朝鮮教育令施行期における中等女子修身教育」、権容奭「大衆文化の交流と日韓相互認識」、8月２１～２２日：日韓合同踏査（北関東）、ハンセン病資料館・国立療養所多磨全生園、足利学校・鑁阿寺、伊香保温泉史跡散策、伊香保温泉松本楼宿泊。8月２２日は台風９号が関東を直撃したため、日韓合同踏査二日目の予定（足尾銅山、日光東照宮・輪王寺他）をキャンセルし、立川に戻る。

<２０１７年度>第２０回日韓歴史共同研究シンポジウム・共同学術踏査（韓国・安東陶山書院ソンビ文化修練院、翰林大学校日本学研究所・韓日歴史共同研究会主催、東北亜歴史財団との共催、日程２０１７年8月１８日～２１日）、8月１8日：バスで安東陶山書院ソンビ文化修練院へ移動。李退渓宗宅、李陸史文学館、聾巖宗宅など探訪、レセプション、8月１9日：国際シンポジウム（ソンビ文化修練院）、主題「日韓両国における儒学思想の共有と変容―現在的意味と関連して―」、報告：鄭在薫「李滉の思想と社会的実践」、若尾政希「『東照宮御遺訓』と日本近世」、琴章泰「茶山と荻生徂来の『中庸』理解 」、小川和也 「日本における牧民書の変遷―東アジアを横断する『牧民忠告』『牧民心鑑』―」、小関悠一郎「近世日本における「富国強兵」論をめぐる議論―近世日本における幕藩政治史・儒学受容との関連―」、都珍淳「李陸史の<絶頂>と義烈―「鋼鉄の虹」と「テリブル・ビューティー」」、8月２０日～２１日：日韓合同踏査、陶山書院、祠堂謁廟、鶴嶺宗宅、安東市内等、２１日は、慶尚北道聞慶市に移動、朴熱義士記念館（朴熱・金子文子記念館見学）。

（５）前掲の日韓シンポジウムの成果集（報告と討論）を編集・印刷し、各所に配布した。本研究の期間内に発刊したのは、次の１冊である。
『日韓歴史共同研究プロジェクト第１７回第１８回シンポジウム報告書』「日韓相互認識」研究会、２３９頁、２０１６年3月３１日
（６）本研究会雑誌『日韓相互認識研究』を３号編集・印刷し、各所に配布するとともに、一橋大学機関リポジトリにて一般公開した。各号収載の論考は次の通りである。
①『日韓相互認識』第６号、１２１頁、２０１５年9月１０日：加藤圭木「朝鮮東北部の社会変容と植民地支配」、酒井雅代「近世後期対馬藩の朝鮮通詞」、伴野文亮「越境する「偉人」金原明善」
②『日韓相互認識』第７号、１２９頁、２０１６年１１月２０日：金理花「在日朝鮮人運動における音楽活動」、洪昌極「植民地朝鮮における東洋拓殖株式会社による江西干拓事業の事例

分析」、蒋允杰「軍需牛肉缶詰生産と朝鮮」、芹口真結子「【史料紹介】長崎県立対馬歴史民俗史料館蔵「天和三年御書物帳」翻刻」、尹朝鐵「【史料紹介】仙台藩医小泉持春・常盤定倉著『正化弁証』」
②『日韓相互認識』第８号、１０５頁、２０１８年２月２０日、酒井雅代「朝鮮信使易地聘礼交渉の頓挫と再開」、李玲実「解放直後の在日朝鮮人女性運動の生成と女性活動家」、芹口真結子「【史料紹介】長崎県立対馬歴史民俗史料館蔵「明和八年辛卯年御掛物方御書物帳」「御書物帳」「御小納戸御書物控」翻刻

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　８５　件）
①小関悠一郎「江戸時代の政治と武士の学び」『歴史評論』813、2018 年、査読無、29-36 頁
②李成市「出土資料は境界を越えることができるのか」歴史学研究会編『第４次現代歴史学の成果と課題』3、績文堂出版（図書所収論文）、2017 年、査読無、295–319 頁
③石居人也「「現場」から組み立てる歴史学」歴史学研究会編『第４次現代歴史学の成果と課題』3、績文堂出版（図書所収論文）、2017 年、査読無、239–249 頁
④吉田裕「「平成流」平和主義の歴史的・政治的文脈」吉田裕他編『平成の天皇制とは何か』岩波書店（図書所収論文）、2017 年、査読無、111–134 頁
⑤渡邊治「近代天皇制・天皇論の課題」歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題–継承と展開の 50 年–』大月書店（図書所収論文）、2017 年、査読無、42–76 頁
⑥加藤圭木「日本の朝鮮侵略史と朝鮮人の主体性」東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために–現在をどう生きるか–』（図書所収論文）、2017 年、査読無、109–126 頁
⑦森武麿「戦前農村経済更正から戦後農村再生へ」『歴史と民俗』33、2017 年、査読無、255–297 頁
⑧池享「時評：『韓国史』教科書国定化問題をめぐって」『歴史学研究』956、2017 年、査読無、30–33 頁
⑨芹口真結子「【史料紹介】長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵「明和八年辛卯年御掛物方御書物帳」「御書物帳」「御小納戸御書物控」翻刻」『日韓相互認識』8、2017 年、査読無、55–97 頁
⑩木村直也「近世の日朝関係とその変容」関周一編『日朝関係史』吉川弘文館（図書所収論文）、2017 年、査読無、177–239 頁
⑪吉田裕「戦争体験をいかに継承するか」『部落問題研究』217、2016 年、査読無、4–19 頁
⑫李成市「東アジア世界論と日本史」吉田裕・李成市他編『岩波講座日本歴史 22』（図書所収論文）、2016 年、査読無、43–71 頁
⑬山内民博「１９世紀朝鮮における屠漢・白丁集団の役と組織」『環日本海研究年報』22、2016 年、査読無、17–29 頁
⑭加藤哲郎「占領期における原爆・原子力言説と検閲」木村朗・高橋博子編『核時代の神話と虚像』明石書店（図書所収論文）、2015 年、査読無、73–92 頁
⑮吉田裕「せめぎあう歴史認識」成田龍一・吉田裕編『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争』岩波書店（図書所収論文）、2015 年、査読無、37–65 頁
⑯若尾政希「江戸儒学とは何だったのか」『歴史と地理』690、2015 年、査読無、37–46 頁
⑰三ツ井崇「植民地朝鮮における親日派の民族運動–朴勝彬の自治・文化運動を中心に–」『愛知大学国際問題研究所紀要』146、2015 年、査読無、63–84 頁
⑱佐藤宏之「実録のながれ–「越後騒動」と歴史・記憶・メディア–」若尾政希編『本の文化史３　書籍文化とその基底』平凡社（図書所収論文）、2015 年、査読無、185–235 頁
⑲松園潤一朗「前近代日本における災害と法・政治–「徳政」の理念をめぐって–」小柳春一郎編『法文化叢書　災害と法』国際書院（図書所収論文）、2014 年、査読無、24–46 頁
⑳石居人也「社会問題の「発生」」吉田裕・李成市他編『岩波講座日本歴史 16』岩波書店（図書所収論文）、2014 年、査読無、281–314 頁
㉑山口公一「植民地朝鮮における「国家祭祀」の整備過程」君島和彦編『近代の日本と朝鮮–「された側」からの視座–』東京堂出版（図書所収論文）、2014 年、査読無、73–119 頁

〔学会発表〕（計　３２　件）
①小川和也「日本における牧民書の変遷–東アジアを横断する『牧民忠告』『牧民心鑑』–」第 20 回日韓歴史共同研究シンポジウム、2017 年
②木村直也「日朝関係の近代的変容と境界領域–明治維新期の対馬を中心に–」立教大学史学会、2016 年
③加藤圭木「政治主体をどう論じるのか」日本植民地研究会第 24 回全国研究大会、2016 年
④若尾政希「近世人の思想形成と「世界」」Imaging the world in premodern Japan、2016 年
⑤吉田裕「軍事史研究の成果と課題」日本歴史学協会、2014 年
⑥若尾政希「日本における書物・出版研究の現在」2014 年台湾大学日本語文学系創設 20 周年記念シンポジウム、2014 年

⑦石居人也「隔離される者／する者にとっての「地域」–瀬戸内海のハンセン病療養所をめぐって–」東京歴史科学研究会第 48 回大会、2014 年

〔図書〕（計　１０　件）
①吉田裕『日本軍兵士』中央公論新社、2017 年、216 頁
②加藤圭木『植民地期朝鮮の地域変容–日本の大陸進出と咸鏡北道–』吉川弘文館、2017 年、280 頁
③鄭栄桓『忘却のための「和解」–『帝国の慰安婦』と日本の責任–』世織書房、2016 年、196 頁
④小関悠一郎『上杉鷹山と米沢』吉川弘文館、2016 年、160 頁
⑤木村元『学校の戦後史』岩波書店、2015 年、224 頁
⑥小川和也『儒学殺人事件–堀田正俊と徳川綱吉–』講談社、2014 年、386 頁

〔その他〕
ホームページ等
「日韓相互認識」研究会　コミュニティ・ホームページ
https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/17439

６．研究組織

（１）研究分担者

研究分担者氏名：糟谷　憲一

ローマ字氏名：KASUYA Kenichi

所属研究機関名：一橋大学

部局名：

職名：名誉教授

研究者番号（8 桁）：80143345

研究分担者氏名：池　享

ローマ字氏名：IKE Susumu

所属研究機関名：一橋大学

部局名：

職名：名誉教授

研究者番号（8 桁）：20134885

研究分担者氏名：木村　元

ローマ字氏名：KIMURA Hajime

所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院社会学研究科

職名：教授

研究者番号（8 桁）：60225050

研究分担者氏名：若尾　政希

ローマ字氏名： WAKAO Masaki

所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院社会学研究科

職名：教授

研究者番号（8 桁）：80210855

研究分担者氏名：三ツ井　崇

ローマ字氏名：MITSUI Takashi

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院総合文化研究科

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：60425080

研究分担者氏名：山口　公一

ローマ字氏名：YAMAGUCHI Kouichi

所属研究機関名：追手門学院大学

部局名：経済学部

職名：准教授
研究者番号（8桁）：20447585

研究分担者氏名：山内　民博
ローマ字氏名：YAMAUCHI Tamihiro
所属研究機関名：新潟大学
部局名：人文社会科学系
職名：准教授
研究者番号（8桁）：40263991

研究分担者氏名：木村　直也
ローマ字氏名：KIMURA Naoya
所属研究機関名：立教大学
部局名：文学部
職名：特任教授
研究者番号（8桁）：50192018

研究分担者氏名：石居　人也
ローマ字氏名：ISHII Hitonari
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院社会学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：20635776

研究分担者氏名：辻　弘範
ローマ字氏名：TSUJI Hironori
所属研究機関名：北海学園大学
部局名：経済学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：20348494

研究分担者氏名：クォン　ヨンソク
ローマ字氏名：KWON Yongseok
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院法学研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：80361848

研究分担者氏名：酒井　裕美
ローマ字氏名：SAKAI Hiromi
所属研究機関名：大阪大学
部局名：大学院言語文化研究科

職名：准教授
研究者番号（8桁）：80547563
（平成26年度から平成28年度）

研究分担者氏名：ベ　ヨンミ
ローマ字氏名：BAE Youngmi
所属研究機関名：大阪大学
部局名：大学院言語文化研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：80612556

研究分担者氏名：林　雄介
ローマ字氏名：HAYASHI Yusuke
所属研究機関名：明星大学
部局名：人文学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：00286246

研究分担者氏名：森　武麿
ローマ字氏名：MORI Takemaro
所属研究機関名：一橋大学
部局名：
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：20095756

研究分担者氏名：田﨑　宣義
ローマ字氏名：TASAKI Nobuyoshi
所属研究機関名：一橋大学
部局名：
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：40107157

研究分担者氏名：李　成市
ローマ字氏名：YI Seong-Si
所属研究機関名：早稲田大学
部局名：文学学術院
職名：教授
研究者番号（8桁）：30242374

研究分担者氏名：渡邊　治
ローマ字氏名：WATANABE Osamu
所属研究機関名：一橋大学

部局名：
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：70013026

研究分担者氏名：加藤　哲郎
ローマ字氏名：KATO Tetsuro
所属研究機関名：一橋大学
部局名：
職名：名誉教授
研究者番号（8桁）：30115547

研究分担者氏名：高柳　友彦
ローマ字氏名：TAKAYAGI Tomohiko
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院経済学研究科
職名：講師
研究者番号（8桁）：80588442

研究分担者氏名：小川　和也
ローマ字氏名：OGAWA Kazunari
所属研究機関名：中京大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：90509035

研究分担者氏名：小関　悠一郎
ローマ字氏名：KOSEKI Yuichiro
所属研究機関名：千葉大学
部局名：教育学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：20636071

研究分担者氏名：佐藤　宏之
ローマ字氏名：SATO Hiroyuki
所属研究機関名：鹿児島大学
部局名：法文教育学域教育学系
職名：准教授
研究者番号（8桁）：50599339

研究分担者氏名：加藤　圭木
ローマ字氏名：KATO Keiki
所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院社会学研究科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：40732368

研究分担者氏名：松田　英里
ローマ字氏名：MATSUDA Eri
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院社会学研究科
職名：特任講師（ジュニアフェロー）
研究者番号（8 桁）：00779902

研究分担者氏名：芹口　真結子
ローマ字氏名：SERIGUCHI Mayuko
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院社会学研究科
職名：特任講師（ジュニアフェロー）
研究者番号（8 桁）：70801158

研究分担者氏名：鄭　栄桓
ローマ字氏名：CHONG Yongfan
所属研究機関名：明治学院大学
部局名：教養教育センター
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：90589178

研究分担者氏名：松園　潤一朗
ローマ字氏名：MATSUZONO Junichiro
所属研究機関名：一橋大学
部局名：大学院法学研究科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：30588439

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。